

### Question13：災害時のために、どんなことを備えたらいいですか？

#### Answer：

- ◆災害時の避難に備え、普段の移乗・移動時の用具をいつでも使えるように整えておきましょう。また、災害時は、移乗だけでは目的を完了できず、避難所までどうやって移動するかをセットで考えなければいけません。目的地・移送ルート等によって、移動方法が変わります。災害時専用の移乗用具の確保も進めましょう。
- ◆普段の移乗用具・移動用具をいつでも素早く取り出せるようにしましょう。移乗用具(スライディングボード等)や移送用具(車椅子等)について、置き場所を決め、介助者がすぐに取り出して使用できるようにしましょう。夜間の災害発生など視界不良時も、介助者間で置き場所を共有しておく、探したり、準備する時間を短縮できます。また、地震や集中豪雨では、停電もありえます。充電できるタイプのリフトなどは、ふだんから充電を切らさないようにしましょう。
- ◆避難に関する計画を確認し、避難ルートに必要な移乗・移動方法を考えましょう。まず、対象者がいる施設および病院、自宅等がどのような災害を受けやすいのかを考え、いざという時に避難する場所・ルートを再確認しておきましょう。災害の種類や規模によって、対象者を避難させる避難ルートや避難先が変わります。いつもは車椅子を使用している対象者であっても、災害時には段差があるルートを通らなければいけない場合もあり、普段の移動方法が使えない場合もあります。逆に、移動方法が特に限定される対象者の場合、移動方法に応じてルートを設定しなければならないこともあります。病院・介護老人保健施設等では、水防法・土砂災害防止法等の法令や厚生労働省からの各通達等により、地震や火災、土砂災害等の各種災害に応じた非常災害対策計画(避難確保計画も含む)の作成の義務があります。平常時から、災害時の計画を作成・内容を更新し備えましょう。非常災害対策計画には、移乗・移動に関すること以外にも盛り込むべき内容があります。詳細は、国土交通省、厚生労働省、各自治体のホームページ、手引等をご参照ください。
- ◆複数の移乗・移動用具、方法を考えておきましょう。災害時、電気は使えるかどうか移乗方法に関わります。停電時に備え、いつもはリフトを使っている対象者に対しても、電気を使わない移動用具も備え、複数手段を用意しておくといいでしょう。普段、車椅子を使用して暮らしている対象者でも、津波や水害等で、上階に逃げなければいけないこともあります。エレベーターが止まっていれば、車椅子だけで避難することは難しいため、移動方法についても検討が必要です。
- ◆災害時の移乗・移動手段を複数検討する中で、人力による対象者の抱え上げやおんぶなどは、平常時は腰痛予防の観点から決して推奨できませんが、災害時は対象者または介助者が、その場にとどまれば落命する可能性がある場合の避難には、やむを得ないこともあると考えます。実際、東京都荒川区の防災区民組織では、健康な人がチームをくみ、予め特定している高齢者等を、災害時にはリアカーやおんぶ帯により協力しあって救出するという取り組みがされています。人力での移乗・移動も考えておく必要があるでしょう。

◆人手を集める手段を持ちましょう。

災害時、施設や病院で避難行動をとる場合、平常時の看護・介護と違って、短時間に大勢の対象者を避難させなければいけません。また、人力で移動する場合、移乗用具を使える時よりも、対象者1人の移乗・移動にかかる介助者数が増えることもあります。緊急時のため、施設では参集ルールを事前に決め、在宅での対象者の場合は人手を集められるような協力体制を作りましょう。

◆災害時専用の移乗・移動用具の確保

人力および通常時の移乗・移動用具だけで、避難を完了させるには限界があります。介助者自身の安全の確保のためにも、平常時から災害用の用具の確保も進めてください。

災害用の移動用具を適切に使用するには、訓練が必要になります。災害が起きてからではなく、平常時からの訓練を進めましょう。

◆災害時専用の用具例：エアーストレッチャー®

エアーストレッチャーは、床を引っ張って移動するタイプの災害時の移動用具です。患者の背面に当たる部分が60秒で膨らみ、対象者を乗せて段差などを引っ張っても、衝撃が緩和され、安全に搬送できるようになっています。

エアーストレッチャーまでの移乗は、できれば4人以上で行いますが、平地では介助者1名で引っ張って移動することが可能です（写真38）。また、機種によっては階上・階下への避難が可能になるものもあります（写真39）。



写真38：エアーストレッチャー®

<http://www.airstretcher.jp/japanese/kunren.html>



写真39：エアーストレッチャー・レイズ・ローバル®

◆避難用具の代替品として、通常の布団やシーツなどに対象者を乗せ引っ張る方法も考えられるかと思いますが、実際試してみると対象者を乗せたシーツと床の摩擦力は想像以上に大きく、人力で引っ張って動かすことは著しく困難でした。できうる限り、専用の器具を揃えましょう。

◆病院の立地から、南海トラフ地震による浸水被害を受けやすいと考え、患者移動等を考えている病院もあります。初動マニュアルを作成し、患者移動のためのエアーストレッチャーの配備などで備えている病院もあります（北川ら 2016）。

<文献>

内閣府，消防庁，厚生労働省等．要配慮者利用施設における避難に関する計画作成の事例集（平第2版）．

<http://www.bousai.go.jp/oukyu/hinankankoku/pdf/hinanjireishu.pdf>

（参照 2018年8月25日）

国土交通省．要配慮者利用施設管理者のための土砂災害に関する避難確保計画作成の手引き（平成29年6月）．

<http://www.mlit.go.jp/common/001189252.pdf>

（参照 2018年8月25日）

全国グループホーム団体連合会．防災ガイドブック．

<http://gh-japan.net/pdf/disaster-prevention-guide.pdf>

（参照 2018年8月25日）

北川喜己，和泉邦彦，小澤和弘，中川隆，高橋礼子他（2016）：伊勢湾台風への対応から学ぶ南海トラフ大地震への浸水地域の病院の備え，日本救急医学会中部地方会誌，12，19-23.